

現行小学校国語科教科書における死と生

渡瀬 茂

要旨

筆者はさきに戦前期の教科書における死について調査報告したが、それとの比較のために、本稿では現在小学校で用いられている教科書について、そこに取り上げられた死のテーマやモチーフを調査報告した。またあわせて、死に関連する漢字「死」「殺」の教科書での取り扱いについても調査報告した。現行の教科書では、戦前の教科書のように自殺や自ら選ぶ戦死を肯定するような教材が取り上げられないのは当然である。しかし、死をなんらかのかたちで扱う教材がないわけではない。それどころが、死に係わる教材はそれなりの数で取り上げられている。ことに戦争における死について、その惨禍を描くために取り上げられるのは戦前の教科書とは大きな違いであることを述べた。また、五社の教科書の中でも学校図書の教科書に顕著な特徴があることを述べた。さらに、教材の中には誤読によって意図せずに、死を肯定する読解が可能となるものが存在することを指摘した。

キーワード：国語科、教科書、死、感動装置

筆者はさきに「政治と慶弔・補注―昭和戦前期国語読本・修身書・小学校唱歌における死について―」（以下「前稿」と題する論文を草し、第二次世界大戦前の尋常小学校教科書について、その死の描写の様相を論じた。それは、死についての日本文化の二面性に関して、その一面が戦前期教科書に色濃く反映していることを確かめるためであった。死と生に関しての日本文化の二重性は、一面は平安期の貴族の文化に由来し、もう一面は平安期の武士の文化に由来する。このような見通しのもとに筆者は日本の文化について考えてきたが、戦前期の教科書には武士の文化に由来する一面が色濃く反映し、そこでは自ら選ぶ死が多く取り上げられていた。しかしこの傾向は敗戦によって少なくとも学校教育においては姿を消した。現行の教科書が戦前期の教科書と異なっていること自体は当然のことと受け止めるが、では現行の教科書が死をどのように扱っているかについては、調査検討しておいて良からうと思う。本稿においては、いささかの調査の結果を報告したい。

漢字「死」と「殺」の取り扱い

教材の文章における「死」の形象を取り上げるまえに、五社の各教科書が文字としての「死」および、「死」と深く関わる「殺」の文字について、各配当学年においてどのように取り扱っているのかを表にしてみよう。ちなみに、現行の教科書は、平成二十二年より実施されている学習指導要領に基づいたもので、一昨年まで使用されたものに代えて、一昨年に検定を受けたもので、昨年より使用されている。両者を比べてみると、ほとんど変化のない部分がある一方で、大きく改訂されている部分もある。この、昨年度より使用されて小学校で使用されている教科書について、表にしよう。なお、「死」は小学校の三年配当、「殺」は四年配当である。

「死」

東京書籍	新しい国語三下	一二七	漢字表	「頭をぶっさかれて死んだほどのきもすけだったし、」
三省堂	小学生の国語三年	一二四	漢字表	「死ぬのがそう遠くないことも、」
教育出版	ひろがることは小学国語3上	四〇	漢字表	「ふな」や「こい」などは、次々に死んでしまいます。」
			漢字表	死後 死ぬ

光村図書	国語三下	五五	「もつと早く死ぬというのか。」
学校図書	みんなと学ぶ小学校国語三年上	漢字表 三八	「頭をぶっさかれて死んだほどのきもすけだったし、」
		漢字表	生死のさかいをさまよう。

「殺」

東京書籍	新しい国語四下	一一二	同じ部首の漢字 使―殺虫ざいの使用
三省堂	小学生の国語四年	漢字表 一四〇	殺虫ざい 虫を殺す 息を殺して様子を見守る
教育出版	ひろがることば小学国語4下	漢字表	「殺風景」という言葉を一年生にわかるように……」
		漢字表	殺気 息を殺す
		漢字表	息を殺して見つめる。
光村図書	国語四下	漢字表 三二	慣用句 息を殺す
		漢字表	殺風景 息を殺す
学校図書	みんなと学ぶ小学校国語四年下	漢字表 七五	□外に殺風景な部屋だった。
		漢字表	息を殺して屋根うらにかくれていた。

うに見えるのである。

戦争と原爆

いずれの教科書も教科書の本文に使われるとともに、新出漢字をまとめた漢字表にも取り上げられるが、このようにして見ると、「死」と「殺」の扱われ方には大きな違いがある。「死」の場合には通常の物語文などの文章に使われた例が初出となっている。たとえば「頭をぶっさかれて死んだほどのきもすけだったし、」は東京書籍と学校図書の両方に取り上げられている「モチモチの木」の文章である。いずれも訓読みの「死ぬ」が取り上げられているが、漢字表では音読みも取り上げられている。

しかし、現行の小学校国語教科書でも、戦争が取り上げられていないわけではない。そのことを考えたいが、その前に「死」が取り上げられる教材の様相について見てみたい。まず表のかたちで「死」が取り上げられている教材について示そう。表には「死」がテーマとして扱われているもの、「死」そのものは扱われなくとも「死」の可能性が前提となるもの、もしくは「死」が重要なモチーフとなっているものに加え、作品のテーマにとつては重要でなく、副次的に取り上げられているもの、あるいは死の恐れがありながら、その死が現実に至っていないものも取り上げる。なお、前者については「※」を付することによって後者と区別し、後者は概要について括弧を付した。もちろんその区別については微妙なところもあり、筆者の判断によっていることは言うまでもない。表は教科書会社ごとにまとめ、その配列は五十音順によっている。また、教科書の実際の文章の引用はカギ括弧で示している。

これに対して「殺」は、三省堂を除いてはまとめた物語文や説明文に使われたものを例とするのではなく、慣用句の事例を挙げるなどの例となっている。そしてその例示された語句も、本来の生命を奪うという意味での例は、音読みでは東京書籍と教育出版の「殺虫剤」、訓読みでは東京書籍の「虫を殺す」のみである。一方で生命を奪うことではない「息を殺す」はすべての教科書で取り上げられている。また「殺風景」も三社で取り上げられている。これを見ると、「殺」の文字については、音読みについても「殺害」「殺人」などは当然の如く避けられ、訓読みにしても人や人に近い種類の動物の生命を奪うような例は避けられている。訓読み語として、「死ぬ」は自動詞であるが、「殺す」は他動詞である。教科書において人が「死ぬ」ことは取り上げられても、人を「殺す」ことは、一部の例外を別にすれば、忌避されているといえよう。戦前期の教科書では人が殺される場としての戦場はしばしば描かれていた。その点で、人を殺し、殺されることは忌避されていなかった。これに対して、現行の教科書は人を殺し、殺されることは忌避され、その結果として、各教科書は「殺」の文字の扱いに苦慮しているよ

学校図書

みんなとまなぶしょうがつこうくごーねん下		ろくべえまつてろよ	(飼い犬の死の可能性への言及)
みんなと学ぶ小学校こくご二年上		スイミー	(大きな魚に食べられる仲間)
		ほたるの一生	(成虫の死)
	※	きつねのおきやくさま	ひよこたちを守って戦ったきつねの死
	※	ヤマタノオロチ	オロチが娘たちを食べることおよびオロチの死
	※	おまえうまそうだな	草食恐竜の子どもを食べようとするティラノサウルス
	※	ランパンパン	(殺されかけるくろどり)
みんなと学ぶ小学校国語三年上	※	あらしの夜に	嵐の夜にともに過ごすヒツジとオオカミ
みんなと学ぶ小学校国語三年下		モチモチの木	(父親が死んだ過去)
		わにのおじいさんのたからもの	(わにを殺そうとするものの存在)
みんなと学ぶ小学校国語四年上	※	一つの花	出征した父親の死の示唆
みんなと学ぶ小学校国語四年下	※	ごんぎつね	兵十によるごんぎつねの死
みんなと学ぶ小学校国語五年上		注文の多い料理店	(主人公が食べられる可能性への言及)
	※	父ちゃんの風	戦場での父の死
みんなと学ぶ小学校国語六年上	※	遠眼鏡の海	死を思わせる犬の失踪
	※	フリードルとテレジンの小さな画家たち	アウシュビッツすなわち「人を殺すためにつくられた施設」
	※	ヒロシマの傷	詩
	※	きのうより一回だけ多く	阪神大震災で被災したきみへ
	※	川とノリオ	詩 家族の死
みんなと学ぶ小学校国語六年下	※	キツネの窓	母親の被爆死の示唆
	※	その日、ぼくが考えたこと	死んだ者たちの幻影
			(交通事故死)

教育出版

ひろがることは小学国語2上	※	きつねのおきやくさま	ひよこたちを守って戦ったきつねの死
ひろがることは小学国語3上		わにのおじいさんのたからもの	(わにを殺そうとするものの存在)
	※	めだか	(渇水による魚類の死への言及)
	※	わすれられないおくり物	アナグマの老いと死
ひろがることは小学国語3下		モチモチの木	(父親が死んだ過去)
		強く心にのこっていることを	(作文例中のペットのカメの死の可能性への言及)
ひろがることは小学国語4上	※	一つの花	出征した父親の死の示唆
ひろがることは小学国語4下	※	ごんぎつね	兵十によるごんぎつねの死
ひろがることは小学国語5下	※	大漁	「いわしのとむらい」
ひろがることは小学国語6上	※	川とノリオ	母親の被爆死の示唆
		ブラッキーの話	(飼い犬の死)

ひろがることは小学国語6下	※	キツネの窓	死んだ者たちの幻影
		伊能忠敬	(高橋至時の死)
※	子どもたちを救いたいーオードリーーヘプバーンの願いー		戦時の子どもや老人の凍死・ユダヤ人迫害・法律家の伯父の殺害

三省堂

小学生の国語一年下		あいしているから ろくべえまってるよ	(ひなの死の可能性への言及「しんでしまうかもしれない」 (飼い犬の死の可能性への言及)
小学生の国語二年	※	きつねのおきやくさま	ひよこたちを守って戦ったきつねの死
小学生の国語二年	※	スーフと馬頭琴	スーフの愛馬ツアスの死
小学生の国語三年	※	わすれられないおくり物	アナグマの老いと死
小学生の国語四年	※	いわたくんちのおおあさん	原爆による死体の描写
小学生の国語四年	※	一つの花	出征した父親の死の示唆
小学生の国語五年		洪庵のたいまつ	(「あつけなくなりました」)
小学生の国語六年		字のないはがき	(「死んだ父は筆まめな人であった」)

東京書籍

新しい国語二下	※	ニヤーゴ	ネズミの子を食べようとして食べられなくなる猫
新しい国語三下	※	サーカスのライオン	男の子を救うライオンの自己犠牲
		モチモチの木	(父親が死んだ過去)
新しい国語四上	※	一つの花	出征した父親の死の示唆
新しい国語四下	※	ごんぎつね	兵十によるごんぎつねの死
新しい国語五		注文の多い料理店	(主人公が食べられる可能性への言及)
	※	手塚治虫	空襲による死体の描写「死体が折り重なっていた」
新しい国語六		風切るつばさ	(仲間殺しの犯人のように)
		生みのいのち	(父の死)
	※	ヒロシマのうた	原爆による死の描写・死体の描写
		桃花片	(父親の老死)

光村図書

こくご一下		まのいりようし	(狩猟などの様子)
こくご二上		スイミー	(大きな魚に食べられる仲間)
こくご二下	※	スーホの白い馬	スーホの愛馬の死
国語三下	※	ちいちゃんのかげおくり	空襲による家族の死と少女の死
国語四上	※	一つの花	出征した父親の死の示唆
国語四下	※	ごんぎつね	兵十によるごんぎつねの死

国語六		※	※
		※	※
		イーハトーブの夢	平和のとりでを築く
		海の命	
		河鹿の屏風	
			広島市民の被爆死
			グスゴブドリりの自己犠牲への言および宮沢賢治の死
			(父の死)
			(主人公の老死)

これらのなかには、戦争に関連した死を扱う教材が含まれている。そのなかでも「一つの花」(今西炬行作)は五社すべての教科書に載せられている。第二次世界大戦の激しいころ、出征する父親のこともよく理解しない頑固なゆみ子の将来を、父親は想う。そして十年後、父親の記憶のない、成長したゆみ子の姿が描かれる。ここでは父親の戦死は記されない。しかしその死は明らかである。戦争による死を取り上げた教材はいくつもあるが、戦場で敵と戦っての戦死は取り上げられていない。学校図書の「父ちゃんの風」は戦場の死であるが、敵と戦って戦死するわけではない。戦場の余暇に平時を懐かしんで風揚げをしていたところを、中国兵の少年に狙撃されるのである。戦争での死ではあっても、戦闘での死ではない。

このなかで、空襲や原爆による市民の死は、いずれの教科書も取り上げている。とくに原爆については、すべての教科書が取り上げているのは、被爆国として、原爆の惨禍を描くという点で共通している。学校図書と教育出版の六年の「川とノリオ」、三省堂四年の「いわたぐんちのおばあさん」、東京書籍五年の「ヒロシマのうた」、同じく六年の「平和のとりでを築く」である。このうち、「いわたぐんちのおばあさん」に詳細な死体の描写が見られるのは、「川とノリオ」が死の示唆にとどまっているのと対照的である。また、学校図書六年の詩「ヒロシマの傷」(与田準一作)は原民喜の詩碑に付けられた傷を題材としたものである。(なお、この詩に続けて、阪神大震災を取り上げた「きのうより一回だけ多く 阪神大震災で被災したきみへ」(川崎洋作)が載せられている。)

また、原爆以外の空襲を取り上げているのは光村図書三年の「ちいちゃんのかげおくり」と、東京書籍五年の「手塚治虫」である。「手塚治虫」では手塚の戦時の体験を取り上げ、空襲の惨禍を描いている。このほかにも、教育出版六年の「子どもたちを救いたいーオードリー・ヘプバーンの願いー」や学校図書の「フリードルとテレジンの小さな画家たち」は、ユダヤ人迫害を含むヨーロッパの惨禍を描いている。ことに後者ではアウシュビッツを「人を殺すためにつくられた施設」と述べている。これら総じて、戦争の死を悲惨なものとして、否定的に取り扱っているといつてよいであろう。各教科書はそれぞれ工夫をこらし、戦争の惨禍を取り上げている。しかしそれらは、いずれも戦争を被害の視点から取り上げている。

学校図書版の特色

わたしはさきにあたらしく指導要領に導入された「伝統的な言語文化」に対応する、神話の教材について述べたことがあった。そのときには東京書籍だけが神話の文章を取り上げていなかったが、今回の改訂で「いなかの白うさぎ」の文章を取り上げ、これで五社すべてが神話を取り上げることとなった。そのうちの四社は「いなかの白うさぎ」を取り上げている。いずれ

も「やさしさ」の物語として読めるものである。これに対して学校図書版は「ヤマトノオロチ」を載せているが、これは人を食い殺すオロチに戦いを挑み、オロチを殺すサノオが描かれる物語であり、神話教材の取り上げ方について、異彩を放っている。このような学校図書版であるが、死についての取り上げ方でも、他の教科書と比べて特徴的である。死を取り上げる教材の数について、さきの表を見ても、学校図書版が他の教科書、ことに三省堂・東京書籍・光村図書の教科書に比べて多いことは見て取れる。そしてその中でも、二年と六年で死を扱う教材は目立つ。

一般に低学年の教科書では動物の擬人化による物語の教材が多い。そのなかで学校図書版の二年の教科書では、肉食動物と、草食動物など肉食動物の餌食となる動物が登場する物語が取り上げられている。「きつねのおきやくさま」では肉食動物のきつねと餌食となりえるひよこたちと、「おまえうまそうだな」ではティラノサウルスとアンキロサウルスとの関係である。本来、一方が他方を食い殺す関係でありながら、そのあいだに親しい関係が生まれる。そこには本来成り立たないはずの信頼関係が生じ、肉食動物の側に回心が生じる。死と生命を考えることになる教材である。同じ学校図書の三年の「あらしの夜に」にも同様の関係が取り上げられる。肉食動物のおおかみと草食動物のひつじのあいだに信頼関係が生じるのである。ただし、「あらしの夜に」の場合は「きつねのおきやくさま」や「おまえうまそうだな」の場合よりも複雑である。ふたりはお互いに相手がおおかみでありひつじであることを知らないままに、再会を約して別れる。再会のときにどのようなことが起こるのであるか。そのような発問に対する子どもたちの答えは、必ずしも教員の望むものではないかもしれない。

六年の教科書、とくにその上下の上では、死に関係する教材が多く取り上げられ、その多くは戦争や災害といった非情の死である。繰り返し、非情の惨禍を学ぶことになる。その内容についてはさきに説明したが、その一方で「遠眼鏡の海」(山下明生作)や「きつねの窓」(安房直子作)のような幻想的な作品も含まれている。この二つの作品はともに、「時間」をモチーフとしている。遠眼鏡は「キャプテンとおじいさんの思い出」の象徴である。そして老犬のキャプテンは海にむかつて泳ぎ去って行く。キャプテンの口元の一筋の血は、死を想起させる。

「きつねの窓」は印象深い作品なので、検討してみよう。狐のために山に入った主人公「ぼく」は、不思議な花畑に出る。そこできつねを見つけ、それを追った主人公は、きつねが店員の少年に化けた染物屋にたどり着く。主人公はだまされたふりをして店員と対話をし、指を染めようと提案する。そして店員は青く染めた自分の指で菱形を作り、主人公にその菱形を覗くように求める。そこに見えたのは銃で殺された母狐の姿だった。そして店員に指を青く染められた主人公が自分の指のあいだから見たのは昔好きだった女の子の姿だった。主人公はお

札に求められた銃を渡し、帰り道に指のあいだを覗くと、子どものころに母や妹と住んでいた家を見た。しかし、家に帰った主人公は、うっかりと指を洗って青い色を落としてしまう。次の日、もう一度指を染めてもらおうと森に訪ね入った主人公は二度と子ぎつねに会うことはできなかつた。子ぎつねにとっては死んだ母狐に会うことができる窓だった。主人公にとっても、失われたかけがえのない人や家に出会うことのできる窓であった。ことに、家は火事で失われ、妹も死んだことが記されている。この窓は時間の力によって失われたものに再会することのできる力を持っていた。そしてその窓の力を考えれば、母も、そして昔好きだった女の子も、死んで現実の世界にはいないのだと読める。深く読めば、いくつもの死が読み取れる教材であり、魅力的な教材である。しかしまた、物語を読み解く力の差が如実に表れる作品でもあるだろう。そして優れた読み手である児童は、死と時間と喪失の哲学的な課題を感じ取り、物語の魅力を知ることとなるであろう。

自己犠牲

前稿で取り上げた戦前期の教科書では、自ら選ぶ死が多く取り上げられていた。それはいわゆる軍国主義教育と結びつくもので、子どもたちを国のための死に向かわせることにつながるものであった。また家族たちにとっても、その死を受容することを求めるものであった。国のために、すなわちなにものかのために死地に赴くことが強く求められていたのである。ひるがえって戦後の教育ではそのようなものは排除されているはずである。しかし、そのなかにあって、現行の教科書の中にも、国のためというのではないが、自らの選択が死を招く、自己犠牲の物語は存在する。本稿の最後に、そのような物語を取り上げよう。

まず、東京書籍三年の「サーカスのライオン」を取り上げよう。「感想をつたえ合おう 読む中心となる人物の気持ちを考えながら読む」の意図による教材で、川村たかしの作である。あらすじは以下のようなものである。サーカスの老いたライオン「じんさ」は火くぐりで人気があったが、年のせいか元気がなかつた。ライオン使用のおじさんに奨められて人間の服を着て散歩にでかけたところ、少年に出会った。ライオンが好きだという少年を夜道に家まで送った。その後少年は、ライオンを訪ねてくるようになったが、あるとき少年の家の辺りで火事が起こった。逃げ遅れた少年を救うためにじんさは、人々が留めるのを無視し、少年を救うが、自身は火の中に姿を消した。明くる日のサーカスで、火くぐりの輪に火がつけられてもそれを飛ぶライオンはいないのに、人々は拍手を続けるのだった。自らの死の可能性を知りながら死地に赴いた自己犠牲の物語である。そして、翌日の人々の拍手は、ライオンの死が英雄的な行動の結果であったことの証である。このような物語を通じて、「自己犠牲」や「英雄性」について、好ましいものとして受け止めるのが自然な流れとなるであろう。とくにこの物語は、その最後の場面がこのような捉え方へと誘導するように組み立てられている。文藝や映画の世界で珍しくない物語であり、たとえば光村図書を取り上げる畑田博「イーハトーブの夢」に言及される宮澤賢治「グスコブドリの伝記」の自己犠牲も同様である。

ところで、この「サーカスのライオン」では、最後の少年を救出する場面にさきだって、少

年とライオンとの交流が描かれ、少年に対する優しい気持ちを描かれる。日常の優しい気持ち、が、非常時において英雄性として表れるとも取れるのである。その点ではこの教材は日常と非常の両方における、人のあるべき姿を描いているのであり、作品は倫理的である。そしてこのような「優しさ」と「英雄性」「自己犠牲」が結びつけられるということは、三社の教科書に取り上げられる「きつねのおきやくさま」にも言えることである。

あまきみこの「きつねのおきやくさま」が学校図書版で取り上げられていることは先に触れたが、同じ教材は教育出版と三笠堂の二年の教科書にも取り上げられている。全文を学校図書版によって引用しよう。

きつねのおきやくさま あまきみこ
むかし むかし おったとき。

はらべこきつねが あるいて いると やせた ひよこが やって 来た。がぶりと やろうと おもったが、やせて いるので 考えた。ふとらせてから たべよう。

そうとも。よく ある よく ある ことさ。

「やあ、ひよこ。」

「やあ、きつねおにちゃん。」

「おにちゃん？ やめて くれよ。」

きつねは、ぶると みぶるいした。

でも、ひよこは 目を まるくして 言った。

「ねえ、おにちゃん。どこかに いい すみか、ないかなあ。こまつてるんだ。」

きつねは、こころの 中で にやりと わらった。

「よし、おれの うちに 来なよ。」

すると、ひよこが 言ったとき。

「きつねおにちゃんって やさしいねえ。」

「やさしい？ やめて くれたら、そんな せりふ。」

でも、きつねは、生まれて はじめて「やさしい」なんて 言われたので、すこし

ぽおっと なった。

ひよこを つれて かえる とちゅう、

「おっとっと、おちつけ おちつけ。」

切りかぶに つまずいて、ころびそうに なったとき。

きつねは、ひよこに、それは やさしく たべさせた。そして、ひよこが「やさしい

おにちゃん」と言う、はうと なった。

ひよこは、まるまる ふとって きたぜ。

ある日、ひよこが、さんぽに 行きたいと 言いだした。

「はあん。にげる 気かな。」

きつねは、そうとつと ついて いった。

ひよこが はるの うたなんか うたいながら あるいて いると、やせた あひるが やって 来たとき。

「やあ、ひよこ。どこかに いい すみかは、ないかなあ。こまってるんだ。」

「あるわよ。きつねおにいちゃんちよ。あたしと いっしょに 行きましょ。」

「きつね？ とんでもない。がぶりと やられるよ。」

と、あひるが 言うと、ひよこは くびを ふった。

「うん。きつねおにいちゃんは、とつても しんせつなの。」

それを かげで 聞いた きつねは うつとり した。そして、「しんせつな きつね」という ことばを、五回も つぶやいたとき。

さあ、そこで いそいで うちに かえると、まってる いた。

きつねは ひよここと あひるに、それは しんせつだった。そして、二人が「しんせつな おにいちゃん」の 話を して いるのを 聞くと、ぼうつと なった。

あひるも、まるまる ふとつて きたぜ。

ある日、ひよここと あひるが、さんぽに 行きたいと 言いだした。

「はあん。にげる 気かな。」

きつねは、そうとつと ついて いった。

ひよここと あひるが なつの うたなんか うたいながら あるいて いると やせた うさぎが やって 来たとき。

「やあ、ひよここと あひる。どこかに いい すみかは、ないかなあ。こまってるんだ。」

「あるわよ。きつねおにいちゃんちよ。あたしと いっしょに 行きましょ。」

「きつね？ とんでもない。がぶりと やられるよ。」

「うん。きつねおにいちゃんは、かみさまみたいなんだよ。」

それを かげで 聞いた きつねは、うつとり して、気ぜつしそつに なったとき。

そこで、きつねは、ひよここと あひると うさぎを、そうとも、かみさまみたいにそだてた。そして、三人が「かみさまみたいな おにいちゃん」の 話を して いると、ぼうつと なった。

うさぎも、まるまる ふとつて きたぜ。

ある日、くろくも山の おおかみが、下りて きたとき。

「こりゃ、うまさうな においだねえ。ふんふん、ひよこに、あひるに、うさぎだな。」

「いや、まだ いるぞ。きつねが いるぞ。」言うなり、きつねは とび出した。

きつねの 体に、ゆう気が りんりんと わいた。

おお、たたかったとも、たたかったとも。

じつに、じつに、いさましかったぜ。

そして、おおかみは、とうとう にげて いったとき。

その ばん。

きつねは、はずかしそつに わらつて しんだ。

まるまる ふとつた、ひよここと あひると うさぎは、にじの 森に、小さい おは

かを 作った。

そして、せかい一 やさしい、しんせつな、かみさまみたいな、そのうえ ゆうかん

な きつねの ために、なみだを ながしたとき。

とつぴんばりの ぷう。

ひよこを太らせて食べようとするきつねに対して、ひよこはきつねに全幅の信頼を置いていた。そのことによつて、きつねはひよこを食べることができなくなる。これはきつねの回心のはじまりである。ひよこはきつねを疑うあひるを説得し、さらにひよこことあひるはうさぎを説得し、三人はきつねを信頼するようになる。このことがきつねの気持ちを次第に変えていく。「うつとりした」「ぼうつとになった」というきつねの描写から、きつねの気持ちを読み取ろうとする教材である。そしてこの教材から、信頼の価値を読み取るようになるだろう。ただし、この点では、さきにも取り上げた学校図書と同じ二年「おまえうまそうだな」や、東京書籍二年の「ニャーゴ」も同様である。ただ、これらと「きつねのおきやくさま」が違ふのは、おおかみが山から下りてきてひよこたちを食べようとするが、きつねはそのおおかみに立ち向かうのである。三省堂の指導書では、挿絵のきつねとおおかみの大きさの違いに着目するように扱っている。小さなきつねが大きなおおかみに勇敢にも立ち向かうという理解になる。きつねの英雄性は際立つであろう。物語に敏感な子どもたちの心を引きつけるに十分である。そしてきつねの英雄性と自己犠牲はひよこたちの感謝の祈りで報われるのである。

しかし、この物語をきつねとひよこことあひるとうさぎの平和な共同体を守るために、きつねが雄々しく勇敢に戦い、戦死した物語と読めばどうだろうか。そして墓前に祈るひよこたちを、戦死者の慰霊碑に祈る民衆に重ねて読めばどうだろうか。ちよつと読み方を変えてみれば、英雄性と自己犠牲の物語は戦死を肯定するものがたりに直結するのである。作者や教科書編集者にそのような意図が皆無であったとしても、読解は読者のものである。そして読者の読解を一定方向に導くのはたやすいことである。

文学的教材はその読み方によつて、多様な読解を許すものである。その読解が一事実の指摘で崩壊し、「名作の教材」がまたたくまに教科書から姿を消す事例を、わたしたちはアルフォンス・ドードーの「最後の授業」に見たことがある。^(注四) 長い年月にわたつて、「最後の授業」は国語愛を訴える物語として、教室で親しまれてきた。わたしも、小学校の時だったか中学校の時だったか記憶は定かではないが、感動した覚えがある。普仏戦争の敗戦によつてフランスのアルザス地方の少年が、国語であるフランス語を学ぶことができなくなり、あすからはドイツ語を学ぶことになるという内容である。^(注四) 国語を奪われる悲劇を通じて、国語の大切さを学ぶ教材として親しまれた。しかし田中克彦は「ことばと言語」のなかで、当時のアルザスの圧倒的

多数の住民の母語がドイツ語であり、主人公もまたドイツ語話者であると言ったことを指摘した。上は文部省から下は教室の教員まで、誤読にもとづいて「最後の授業」という翻訳物語を感動装置に仕立て上げていたのである。文学的感動がいかに胡散臭いものであるのかを証明した事例であった。

自己犠牲の物語は人の感動を招きやすい。しかしその感動は主観であり、主観はいかなる客観にもからめとられる契機を有する。回心したきつねの死は、生命の大切さを伝える教材における自己犠牲の物語として、うるわしく、感動的である。「きつねのおきやくさま」はすぐれた感動装置である。しかしその自己犠牲はなかまのためのもの、そして共同体のためのものと理解されれば、そこには感動の招く危険が存在する。共同体を国家といいかえることもできる。もちろんそこには、作者自身が思いもよらない読解が生じるであろう。

もちろんこのようなことは作者が想定するものではないであろうし、教科書編集者も想定はしていないであろう。そもそも、このような物語を教科書で読まないにしても、英雄性と自己犠牲の物語は、小説にしろ漫画にしろ映画にしろ、世にあふれていて、いやおうなくどこかで目にすることになる。そしてそれらは感動装置であるから、人は感動することになる。しかし物語の感動は読む人の足をすくう危険性をはらむ。文学的教材は、どう選ぶのかということよりも、それをどう読み解くのかということについて、不断の検証を加え続けられなければならない。

注

- (一) 拙稿「政治と襲殺・補註―昭和戦前期国語読本・修身書・小学校唱歌における死について―」(H26・3 近大姫路大学紀要第6号)
- (二) 拙稿「小学校学習指導要領国語科の「伝統的な言語文化」と神話の教材化」(H24・3 近大姫路大学紀要第4号)
- (三) 府川源一郎「消えた「最後の授業」―言葉・国家・教育―」(H4 大修館書店 参照)
- (四) 田中克彦「ことばと国家」(S56 岩波書店)